



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 「ケニア国ニャンザ州保健マネージメント強化プロジェクト視察」レポート                                          |
| Author(s)    | 武智, 彩                                                                       |
| Citation     | 目で見るWHO. 2012, 48, p. 14-15                                                 |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/86760">https://doi.org/10.18910/86760</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

●jaih-s 主催の「国際保健 学生フィールドマッチング」企画に参加して



## 「ケニア国ニャンザ州保健マネージメント 強化プロジェクト視察」レポート

神戸市外国語大学外国語学部国際関係学科 武 智 彩



サーベイランス同行で訪問した診療所

2011年夏、日本国際保健学会学生部会(jaih-s)主催の学生フィールドマッチング企画を通し、JICAのプロジェクトである「ケニア国ニャンザ州保健マネージメント強化プロジェクト視察」に参加しました。本研修では、隣国ソマリア保健省の方々に対する研修から、コミュニティヘルスワーカーの方々の仕事まで、行政のトップレベルからコミュニティレベルまで幅広い活動の見学をさせていただきました。



ホームステイ先の家族と共に

### ①Team Buildingの大切さ

ソマリア(正式にはソマリランド)の保健省の方々に対す

る研修の見学の際に印象に残ったのが、今まで顧みられてこなかったTeam Buildingに関するワークショップでした。ひとつのプロジェクトで、人々がチームとして協力しようというのは当たり前だと今まで考えていましたが、これまでのプロジェクトにおける失敗の原因の一つが、チームの協力関係が構築できなかったことにあったと本研修を通して知りました。足並みがそろわなければ効果は上がらないという意識を徹底して持たせることの大切さに気づかされました。



サーベイランスの様子

### ②診療所への調査同行で感じたこと

この調査は数十に及ぶ質問に対し、7段階の評価で答えるものだったのですが、そこで感じたのは、数字での評価の限界でした。インタビューの中で、質問に対する受け答えと評価として答えた数字との差異を感じ、困っていることがあるなら遠慮なく答えとして示したほうがいいのと思うことがありました。こうした調査で現場の本当の声を聞くには何度も対話を重ね、本音を伝えやすい環境づくりが必要であると感じました。

さらに調査同行でわかったのは、電気が使えない施設が多いことでした。出産を行う施設があっても、なにかあった時に電力が必要な機器は使えないし、もし、夜に出産を行うのであればどうやって明りを灯すのだろうと思いまし

た。



JICAオフィスのみなさと

### ③コミュニティヘルスワーカーの仕事の限界

コミュニティの人々の健康状態をチェックするために家々を回るコミュニティヘルスワーカーの人々は基本的にボランティアです。そのため、農繁期になると訪問の時間が取れず、報告では月を追うごとに訪問数が減っていました。せっかくトレーニングしても続かなければ意味がな

いので、数を減らすことにしたそうですが、ボランティアという形で続けていくこと自体に限界があるため、人数削減は問題解決につながらないと思います。彼女たちが、仕事を続けるためのインセンティブとなるものが早急に必要だと感じました。

私の専攻は国際関係学で、国際保健に関する知識を学ぶ機会はほとんどありませんでしたが、本研修を通して、実際に現場で働く方々の仕事を見学し、本や論文では見えてこなかった問題を感じる機会に恵まれました。何より感じたのは、自分の住む国や地域のために何をすべきかを真剣に考え、取り組んでいる現地の人々の力強さです。将来、国際保健を担う人材になりたいと考えている自分にとって、本研修で得られたものは非常に価値のあるものでした。



県病院の診療費が書かれた看板/伝統医療の案内



ミツンバスラムの子供たち